

P1-15-4 腔原発の Non-Hodgkin リンパ腫の一例

大分大

岡本真実子, 西田正和, 奈須家栄, 高井教行, 檜原久司

腔原発の Non-Hodgkin リンパ腫は非常にまれで、出血や疼痛、腫瘍触知で発覚することが多いため、炎症性疾患や上皮性腫瘍との鑑別が困難とされている。

症例は44歳、4経産2経妊、不正性器出血を主訴にA産婦人科を受診した。同院での子宮頸部および体部細胞診では異常を指摘されず、機能性子宮出血の診断でKaufmann療法を施行されたが症状は改善せず、B産婦人科を受診した。同院の腔鏡診で腔壁の潰瘍を指摘され、腔瘍を疑われたが同部位の細胞診はclass Iであった。腔瘍を完全には否定できないため、精査の目的で当科を紹介された。当科の診察でも同様に腔壁後部を中心に広範な潰瘍を認め、また、MRIでは腔壁内に9cmの腫瘍を認めた。腔壁の潰瘍部位の生検を行ったところ、B-cell lymphoma, ABC type, IE期(Ann Arbor分類)の診断であった。診断確定後、CHOP療法を1コース、R-CHOP療法を5コース施行後、更に放射線療法を行った。加療後腫瘍は著明に縮小し、現在外来フォローされている。

女性生殖器原発の Non-Hodgkin リンパ腫は非常にまれな疾患であり、女性の節外リンパ腫の2%程度で、腔原発はそのうちの6%といわれている。悪性リンパ腫の発症機序は、いまだ不明であるが、EBV, HCV, ピロリ菌, クラミジアトラコマティスなどの慢性感染が関与しているという報告もある。本症例では、上記のような感染は認められず、発症の原因は不明である。悪性リンパ腫の治療は、CHOP療法が主体であるが、最近では、分子標的薬リツキシマブを併用したR-CHOP療法が一般的となっている。今回の症例ではR-CHOP療法および放射線療法で完全寛解が得られた。

P1-15-5 子宮筋腫フォロー中に平滑筋肉腫を発症した1例—MRIの経時的变化を含めて

聖路加国際病院女性総合診療部

樋田一英, 堀井真理子, 真島 実, 彦坂慈子, 堀内洋子, 秋谷 文, 林 良宣, 酒見智子, 塩田恭子, 斎藤理恵, 山中美智子, 百枝幹雄

子宮肉腫は稀な疾患で、その診断にはMRIが有用であるとされている。また、一般には肉腫の発生は筋腫とは別(de novo)とされているが、肉腫が筋腫内から発生したと考えられる症例も少なからず報告されている。今回我々は、初診より12年間フォローした子宮筋腫手術拒否例で、閉経から3年後に、観察していた子宮筋腫内に肉腫が発生した症例を経験したので報告する。症例は55歳、未経妊、閉経52歳、下腹部痛を主訴に43歳時に初診、10cm大の筋腫を指摘された。定期的にフォローを受け途中手術勧めるも希望せず経過観察を続けた。MRIは計17回施行した。閉経後筋腫は縮小傾向にあったが、途中液状変性を指摘、その2ヶ月後のMRI検査で腫瘍の再増大が指摘され、肉腫疑いでATH+BSOを施行した。摘出標本では、子宮筋層内に、中心に出血と壊死変化を伴う大きな腫瘍を認め、その一部にhigh gradeな肉腫の部分も認めた。術後診断は平滑筋肉腫1B期で、術後GD療法をおこなった。子宮筋腫は閉経後諸症状が改善することが多いので、逃げ込み療法などに代表されるように、一般には閉経がフォローのめどとなるが、閉経を過ぎても本症例のように悪性転化する場合もあり得ることが示された。今回の症例により、筋腫の保存的フォローの場合には肉腫への転化の可能性があると、保存的にフォローした場合は閉経以降のフォローの必要性が示唆された。

P1-15-6 初回治療から17年経過後に基靭帯に再発した平滑筋肉腫の一例

日本大

澤田晃子, 市川 剛, 仲尾岳大, 中村晃和, 千島史尚, 高田眞一, 山本樹生

【はじめに】子宮平滑筋肉腫は、子宮悪性腫瘍の1~3%と比較的まれであるが、血行転移をきたしやすく、一般的に治療抵抗性で予後が不良である。今回、初回治療後、17年経過してから基靭帯リンパ節部に再発した症例を経験したので報告する。症例】62歳3G3P17年前に平滑筋肉腫の診断で単純子宮全摘+大網部分切除+虫垂切除施行。術後診断は平滑筋肉腫IIIa期(pT3a, pN0, pM0)、術後ADM療法を6コース施行されその後再発はなかった。今回前医でCTを施行され骨盤内腫瘍を確認、当科受診となった。PET-CTで骨盤内腫瘍に集積を示し、骨盤壁、右直腸壁に接して腫瘍が存在するため消化器外科、整形外科に相談した上で骨盤内腫瘍摘出術を施行した。腫瘍は右内腸骨動脈、基靭帯を巻き込んで発生していた。骨盤骨には連続しておらずCUSAを用いて内腸骨動脈を露出して結紮して切断し、更に中脚、後脚を処理し、基靭帯摘出術により腫瘍を摘出した。病理所見は平滑筋肉腫であり17年前の病理所見とも酷似しmetastatic leiomyosarcoma in retroperitoneumと診断された。【考察】平滑筋肉腫は、比較的まれな疾患であり、再発転移を起こした場合には予後は極めて不良とされる。Leiomyosarcomaでも細胞分裂数が少なく悪性度の低いものは、早期ではなくむしろ5年以上経過した後に再発することがあるので注意が必要である。本症例では腸管や骨盤骨に近接した腫瘍ではあるが、孤立性腫瘍であることより腫瘍摘出術を選択した。再発転移した予後不良と考えられる症例でも、十分検討し症例を選び積極的に切除し、化学療法を行うことにより予後、QOLを改善できる場合もある。